

最優秀賞 国土交通大臣賞

水のある風景がなくなつて

宮城県 石巻市立石巻中学校

三年 西牧 奏

ペットボトル二本分の水をもらうのに、五時間。私が生きていくうえでこんなことがあるなんて、今まで想像したことなかった。三月十一日の東北地方太平洋沖地震と津波は、私達の石巻を破壊し、たくさんの方の命を奪い、人々を悲しみに追いやった。

今回の震災では、あまりにも突然に「水のない生活」がやってきた。学校で避難生活をしているときは、トイレの水はバケツで池からくんで使い、風呂には十日以上入れず、歯磨きもできなければ、料理も飲食もままならない……。この他にもざっと考えるだけで、手洗い、洗濯など、普段私達が当たり前にとっていた行動が全てできなくなった。正直、今まで生きてきて、水がない生活など考えようもしなかった私は急の事態でどうしていいのか分からなくなつた。まさに、なくてはならない、生活の一部を突然なくしたのである。このとき私は初めて、自分がどれだけ水と関わり合ってきたか、そして無駄遣いをしていのかを痛感した。思えば、私は、風呂に入るときもシャワーを必要以上に出しているし、手洗いするときも、めんどくさがって出しっぱなしにすることが多かった。親に注意されても、「このくらい……」とか、（使つてなくなるものではない）などと軽く受け流していた。しかし、震災後は、水というものをそんな風にしかとらえていなかった自分がすごく恥ずかしくなつていた。

それからというもの、私は浄水場に行つて水をもらう度に、有効な使い方は何かを必ず考えるようになったし、何よりそこで働いて、私達のために水を用意してくださっている方々に「ありがとう」と声に出して伝えるようにした。そうすることで、少しでも水に対しての感謝の気持ちが増え、思つたからだ。近所のお年寄りの水くみも積極的に手伝い、「ありがとね。」と言われる度に心が温かくなった。いつの間にか、水は人と人とのつながりの輪もつくつていたのだと感じ、うれしい気持ちになった。

そして、震災から二週間後、蛇口をひねったら……水が出た。やっとでたという気持ちになるのと同時に、この水と経験を無駄にはできない、守つていかなければならないのだという強い思いが芽生えた。

二週間ぶりにやっと使えるようになったパソコンで調べてみたら、水資源はたくさんあるわけではなく、私達が守つていかなければならない貴重な財産だということを知った。水辺環境を整えるために、ダムの開発や浄水場でたくさんの方が努力していることも知った。私は、これからは、「世界の水資源」という大きな枠で、有効利用したいと強く感じるようになった。

震災から二ヶ月以上が過ぎた今、今回の経験を思い返すと、水というものは、自分達の生活すべてにおいてかかせないものであり、必要なものであると心から思う。きれいな水が私一人に届くまで、大勢の人が関わっていることも強く実感した。そして、それはこれからも続いていく。この震災では、街を津波が襲つて水の怖さを目の当たりにし、人にとって大切な水、しかし命を奪つたのもまた水、という矛盾のようなものを感じていた私だが、だからこそ、その偉大さが分かったと思つている。水の環境を整備して、いち早く水を届けてくれた人、少ない水を三人で分け合った友……。人と人をつなぐのも水だった。

そう気付かせてくれたことを思えば、私にとつて決して悪いことばかりではなかったのだ。水の重要性がよく分かった今、この二ヶ月間、私を支えてくれた「水」に私は感謝して生きていきたい、もっと深く関わっていききたいと思う。水について考えるための、新たな一歩を今、歩み始めたような気がする。